「一人ひとりの人生の基盤としての理念」
～あなたもわたしも「いま、ここ」にいたいと思える場をつくる～（解説）

「一人ひとりの人生の基盤としての理念」は、一人ひとりが大切にされる場をつくるための根本的な考え方を示したものです。人とのつながりが感じられる社会の中で、それぞれの居場所をつくることができるようにとの願いが込められています。
以下、この理念で重要視した3つの着眼点について説明いたします。

一番目の着眼点は、誰もが「権利ある主体」である一人ひとりの人間であるという点です。

子どもも大人もすべての人がそれぞれの「生（いのち）」を全うする権利ある主体者です。一人ひとりの子どもはもちろん、大人もみんな権利ある主体者です。私たち一人ひとりは生まれ育った環境はさまざまではありますが、お互いが生まれながらにして「生（いのち）」を全うする権利を持っていることを、いつも念頭に置いておく必要があると考えます。

そして、すべての人の「生（いのち）」が尊重され、生きられる社会になることが必要です。多文化共生社会に生きる私たちは、子どもも大人も多様な個性を持つ人々が同じ時代を生きています。障がいの有無、言葉や信仰の違い等によって誰もが差別や偏見を受けることなく、生きづらさや心地悪さを抱く人がいないよう、お互いに「生（いのち）」を尊重し合い、すべての人が幸せに生きられる社会を目指すことが大切であると考えます。

二番目の着眼点は、「いる」ことができるコミュニティが必要であるという点です。

一人ひとりが人とのつながりを感じられるよう、継続的で応答的な関係をつくる必要があります。応答的な関係とは、「あなた」と「わたし」の2人が双方向の関わりがある状態です。「わたし」の思いを伝えることに意識が向いており「あなた」の声を聴くことができていない場合や、反対に「あなた」の声ばかりを聴いていて「わたし」の思いを伝えられていない場合は、2人の関係が一方向になっている可能性があります。一人ひとりの存在が認められた上で、継続的で応答的な関係性がつくられると、私たちは人とのつながりの中にいるということが感じられ、安心感を持って自分の力を発揮することができると考えます。

そして、一人ひとりが未来につながる体験をし、「いる」ことができるコミュニティにしていくことが大切です。さまざまな体験の積み重ねが一人ひとりの未来へとつながります。子どもたちであれば家庭や学校等、大人であれば職場等の人生において多くの時間を過ごす場が、安心感を持って参加できるコミュニティとなれば、「いま、ここ」にいたいと思える場となると考えます。

三番目の着眼点は、一人ひとりがいられる居場所づくりが必要であるという点です。

誰もが人とのつながりの中で「いる」ことが実感できる居場所があることが重要です。一人ひとりの存在が認められ、人とのつながりの中で生きていることが実感でき、物理的にも精神的にも安心・安全を感じられる「いま、ここ」にいたいと思える場が居場所となると考えます。

そして、その居場所をつくるのは「誰か」ではなく、他でもない「わたし」たち一人ひとりであると考えます。